

# 広島大学学術情報リポジトリ

## Hiroshima University Institutional Repository

Title	国際教育交流における高校生と留学生のアカルチュレーション : 日本の地域社会と異文化の「関り」の構築
Author(s)	恒松, 直美
Citation	広島県立日彰館高等学校研究紀要 : 46 - 53
Issue Date	2024-03
DOI	
Self DOI	
URL	<a href="https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00055138">https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00055138</a>
Right	
Relation	



## 国際教育交流における高校生と留学生のアカルチュレーション

### — 日本の地域社会と異文化の「関り」の構築 —

広島大学森戸国際高等教育学院 恒松直美

#### はじめに

本稿では、日本の大学の交換留学生と地域高校生の異文化間能力育成を目的として実施した国際教育交流に焦点をあて、留学生と高校生の国際教育交流を企画・実行し、司会進行した体験と参与観察に基づき、留学生と高校生との異文化間インタラクションと関わりについて、アカルチュレーションの視点から考察する。グローバル人材育成プログラム 120「吉舎おもてなしプラン」国際教育交流の発展の背景には、高校生と留学生との意義ある異文化接触と関りの構築があった。その異文化接触の場について、留学生と高校生が相互の文化をどう認識する場となってきたのか、教育的にどのような意味を持ってきたのか、についてアカルチュレーションのモデルを参考に論じる。

グローバル人材育成プログラム 120「吉舎おもてなしプラン」は、広島大学と広島県立日彰館高等学校との協力により、2014年より9年にわたり継続してきた。広島県立日彰館高等学校と広島大学短期交換留学プログラム（Hiroshima University Study Abroad Program, HUSA）<sup>1</sup>留学生・広島大学学生との国際教育交流と異文化間能力育成研修の場として、実践を通じ改善を重ね発展させてきた。その教育現場は、留学生と高校生の異文化間インタラクションを起こすサード・カルチャー（“third Culture”）を作り出す場でもあり、その考察も重ねてきた（恒松 2021, 恒松 2022, 恒松 2023a, 恒松 2023b）。留学生と高校生の双方から相互の文化への興味を喚起し、英語と日本語の使用により参加者をつなぎ、共感の場となる“third culture”を作ることを筆者は目指してきた（恒松 2023b）。本稿では、その異文化接触の体験が持つ意味についてアカルチュレーションの理論に基づき考察する。

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の世界的流行（パンデミック）によりニュー・ノーマルへの対応が必要となる状況下においても、広島県立日彰館高等学校と筆者は新しい形での国際教育交流を模索し、本国際教育交流を中断することなく継続して実施した。結果、本国際教育交流事業は、これまで、対面・オンライン・ハイブリッドの3つの形式による国際教育交流を体験した（恒松 2021, 恒松 2022, 恒松 2023a, 恒松 2023b）。2020年と2021年度は、対面による実施が困難である状況から、日彰館高等学校のある広島県三次市吉舎町・筆者と一部学生のいる広島県東広島市にある広島大学・留学生のいる海外をオンラインでつなぐ新しい形式のハイブリッドの国際教育交流を実施することとなった。高校生からの「吉舎にいても世界とつながれる」との感想が示す通り、日本の高校生が海外の留学生とつながる新しい可能性を皆で体験する場へと発展した。新しい教育方式による異文化間能力育成の教育の方向性を探りつつ今に至っている。

---

<sup>1</sup> 以後、「広島大学短期交換留学プログラム（Hiroshima University Study Abroad Program）」を「HUSA プログラム」と称する。広島大学は、北米・ヨーロッパ・オセアニア・アジアの34か国の115大学及びUSAC（University Studies Abroad Consortium）とUMAP（University Mobility in Asia and Pacific）の2コンソーシアムと協定を締結し、これまで995名が参加している（2023年6月時点）。HUSA プログラムは1996より開始され、毎年約40~60名の留学生が「HUSA プログラム交換留学生」として広島大学に1年間または1学期留学している。

## グローバル人材育成プログラム 120「吉舎おもてなしプラン」国際教育交流と異文化間能力育成研修

本国際教育交流は、2014年から2019年までは、広島大学短期交換留学プログラム(HUSA)留学生が参加した。その後、2020年度からは筆者の授業“Glocal Internship: Intercultural Competence in Japanese Society”(「グローバル・インターンシップ: 日本社会における異文化間能力」)と”Japanese Society and Gender Issues”(「日本社会とジェンダー」)の受講生のフィールドワークとして一部内容を構成してきた。2014年度から2019年まで対面で開催し、2020年度と2021年度は吉舎・広島大学・海外をオンラインでつなぐハイブリッドの形式で実施した。2022年度から再び日彰館高校を訪問し、「異文化間能力育成研修」及び『吉舎おもてなしプラン』国際教育交流」として対面で実施している。広島大学からの参加者は、主にHUSAプログラム交換留学生・総合科学部国際共創学科学生である。本実習により、「グローバル・インターンシップ」の受講生は、日本の地域の高校生との関りを学校での実践の場で体験する。実習では、「留学生と日本の高校生の異文化間インタラクションを起こす方法」と題してグループプロジェクトを企画し、当日、高校において実践を行う。「日本社会とジェンダー」の受講生は、ジェンダーに関する質問を用意し、高校生に質問して日本の学校のジェンダーに関する課題について理解を深めるとともに、学校現場も観察する。留学生と高校生が実践プロジェクトを通じて対話したり、共にジェンダーを考える体験の場とすることで、双方に意義ある国際的体験学習の場を作ってきた。

2023年度は9回目となり、2022年度に引き続き、広島大学の学生が日彰館高校を訪問して対面で実施した。広島大学からは、アメリカ・イギリス・フランス・ニュージーランド・スペイン・フィンランド・ドイツ・エジプト・コロンビア・韓国・中国・台湾・香港・タイ・日本出身の学生45人、日彰館高校の高校生206人の251人が参加する大規模な国際教育交流となった。第1部の国際教育交流では、ドイツからの留学生によるスピーチ、グループワークや絵カードを使用したクイズを行い、筆者の英語と日本語による司会で留学生と高校生の双方からの異文化間インタラクションを起こす場を創った。第2部の各教室でのセッションでは、まず、高校生が日本文化紹介を行い、続いて、「留学生と日本の高校生の異文化間インタラクションを起こす方法」をテーマとした留学生のプロジェクトを実践した。「日本社会とジェンダー」の受講者は、高校生活におけるジェンダーの課題について、高校生に質問をした。第3部の吉舎の街歩きでは、5～6人のグループを作り、高校生による町の歴史や文化の紹介とガイドをもとに、高校周辺を広島大学学生と一緒に歩いた。高校生との街歩きは、留学生から大切な思い出としてよく語られる体験である。全体会と教室でのプロジェクト実践の後、リラックスした雰囲気の中で語り合いながら町を歩く体験は、双方にとり貴重な異文化接触の時間となっている。

表1. 2023年度 国際教育交流会・異文化間能力育成研修のスケジュール (2023年11月11日)

10:30	日彰館高校到着 Arrival at Nisshokan HighSchool	
11:00-11:45	全体会 (体育館) InternationalExchange (All School)	
12:00-12:50	クラス交流 (各 HR 教室) Classroom Activity	
12:50-13:35	昼休憩 (多目的教室) Lunch Break	
13:40-15:20	吉舎街歩きガイドツアー Guide Tour in Kisa	
15:30-15:50	お別れ式 Farewell Ceremony	
16:10	出発 Departure	

表 2. 国際教育交流会(全体会)の内容

11:00-11:10	留学生による自己紹介 (10分) * International Students' Speech
11:10	グループアクティビティ (全体) (35分) Group Activity
(1)	グループ内で自己紹介 (10分) [11:10-11:20] Self Introduction in Each Group
(2)	留学生・高校生に関する質問 (10分) [11:20-11:30] Questions to Students
(3)	絵カードを使用したクイズ (15分) [11:30-11:45] Quizzes – Using Pictures



表 3. クラス交流 (各クラスにおける日本文化紹介と留学生の実践プロジェクト)

<1st Round 1 ラウンド>	
(1)	高校生から自国文化の紹介 (15分) [12:00-12:15] Introduction of Japanese Culture (High School Students)
(2)	留学生によるプロジェクト/ 質疑応答 (15分) [12:15-12:30] Project of Hiroshima University Students
<2nd Round 2 ラウンド>	
(1)	留学生によるプロジェクト/ 質疑応答 (15分) [12:35-12:50] Project of Hiroshima University Students



表 4. 「クラス交流」スケジュール (留学生プロジェクト実践・ジェンダーに関する質疑応答)

Class	1 (1年1組)	2 (2年1組)	3 (3年1組)	4 (1年2組)	5 (2年2組)	6 (3年2組)
<b>12:15-12:30</b> 第1ラウンド	Internship Group 1	Internship Group 2	Internship Group 3 (Internship Group 4 観 察)	Gender Group 1&2	Gender Group 3&4	Gender Group 5&6
<b>12:35-12:50</b> 第2ラウンド	Gender Group 1&2	Gender Group 3&4	Gender Group 5&6	Internship Group 4	Internship Group 1 (Internship Group 3 の 3 人は観察: 3A)	Internship Group 2(Internship Group 3 の 2 人は観察: 3B)

## アカルチュレーション・モデルから見た留学生と日本の地域社会の人々との関り

Berry (1992)のアカルチュレーションモデルでは、自身の文化価値とホスト文化の価値をどの程度価値づけて維持していくかにより、「統合」・「同化」・「分離」・「周辺化」の4つの状態が提示されている。「統合」は、個人が自身の文化を維持しつつホスト文化または主流の文化規範に従うことができる場合に起こる。「同化」とは、個人がホスト文化や主となる文化の文化的規範に従う場合に起こる。「分離」は、自身の文化を維持する意向が強く、ホスト文化または主流となる文化を拒否する場合に起こり、「周辺化」は、個人が自身の文化とホスト文化の両方を拒絶した場合に起こる。

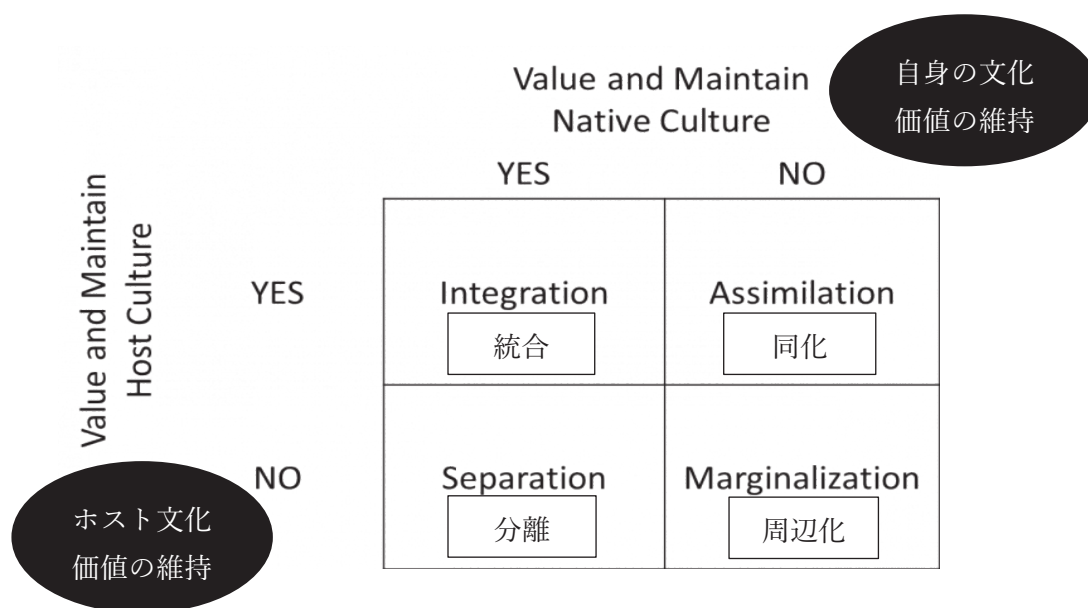


図1. Berry's (1992) のアカルチュレーション・モデル (“Acculturation Model”)

アカルチュレーションモデルに基づいた場合、本国際教育交流事業に参加する留学生と高校生は、どの状態にあるのかについて考察してみたい。第1に、**グローバル人材育成プログラム 120 「吉舎おもてなしプラン」**において、留学生と高校生は何を学んでいるのか、である。双方に意義ある教育的体験の場を創ることが継続的実行を可能とする。本事業が高校生と留学生にとり意義ある教育機会として継続できた理由として、**交換留学生の日本留学の目的と高校生の異文化間能力育成を連携させ、国際教育として双方に意義ある教育現場を構築した（恒松 2021）**ことが挙げられる。留学生の日本文化体験と高校生の留学生との異文化接触の体験を、国際的体験学習として意義ある形で連携させたことで、高校生と留学生の双方にとり魅力ある体験学習の場が形成されてきた。

高校側は、2014年の「吉舎おもてなしプラン」の立ち上げ時点では、高校生による日本文化の紹介と日彰館高等学校のある広島県三次市吉舎町の地域紹介を企画し、日本文化の「おもてなし」として留学生を「もてなす」ことを軸としていた。留学生は日本文化のもてなしを体験できるとともに、高校生は主導的に留学生を迎える準備を行い実践をするという異文化の接点を作り出した。その後、2015年度からの留学生と高校生の双方からのインタラクションを起こす全体会としての国際教育交流会を筆

者が導入し、「サードカルチャー」を体験する場を構築してきた(恒松, 2023)。さらに、留学生が主導で留学生と異文化間インタラクションを起こすプロジェクトの実践も導入するなど、常に内容を更新し変容を遂げてきた。日本の文化紹介を日本に興味を持つ留学生に行い、「もてなす」ことを軸とする部分に関しては、平等主義をめぐる「統合主義」対「分離主義」の視点(江淵, 1991)及び、日本人が留学生や外国人を特別扱いしがちな「顧客としての留学生」(江淵, 1991)にも鑑み考察を要する点である。江淵(1991)は、「留学生顧客論」が議論される中、平等に扱うことの意味について見解が分かれていると述べている。留学生が、言語的、文化的、経済的にハンディを負っている現実とそれを無視して形式的に自国民学生と対等に扱うことで逆に対等でない状況が生まれる現状について指摘しているが、それは30年以上たった今も同じ課題としてある。また、あまりに顧客的に扱うことは留学生の自発性や自律性を育成する機会を失うことにもつながり(恒松, 2005)、日本社会の中で現実的に人々と関わる機会をなくすることにもなりかねない。

ここで注目すべきは、「おもてなし」も日本文化の大きな特徴であり、それを学問、そして、実体験として留学生が教育的に学ぶ場とすることができれば、単なる「顧客」ではなく学びに転換できることである。日本社会においてもてなしを受ける体験を留学生が相対化して考察する場を作ることにより、留学生にとり意義ある日本文化体験となる。この体験は、留学生が現実的に地域の人々との関係性に基づき地域社会や日本の礼儀などを学ぶ場とすることができる。どのような高校と大学との関係性の中でそれが成立し、誰が何の役割を担い、その関係性における礼儀などについて教員が理論を踏まえて解説し、それをフィールドワークで観察するとともに実践し、リフレクションする場として位置づけることにより、日本文化を学問として体験学習する場として成立する。教育的介入なしに留学生と日本の高校生との異文化間接触は簡単には実現しない(Tsunematsu 2023, 恒松 2023b) 現実があり、異文化を背景に持つ人との関りについて学生が主導的に考え、体験を通じて自身の異文化の認識を問うような場にすることは、「おもてなし」体験においても可能である。

2014年の開始時より、「おもてなし国際交流」をテーマとして本事業を掲げたことの意義として、留学生を招聘し日本文化紹介をする場としたことにより、留学生の高校への入り口のハードルを下げるとともに、高校生にとっても留学生と接触するハードルを下げることができ、友好的な出会いの場の入り口となってきたことがある。高校生と留学生が日本文化体験を通して関わる国際教育交流の場に一歩足を踏み入れる貴重な場となってきた。餅つきや書道・茶道・年賀状作成、高校生のガイドによる街歩きの体験は、日本での文化体験を待ち望んで来日した留学生には、とても魅力ある体験学習の場である。一生に一度しかないであろう交換留学において日本文化体験を地域の高校生とともにする貴重な場なのである。

第2に、留学生は、アカルチュレーションモデルのどの段階にあるかについて考察してみたい。「吉舎おもてなしプラン」は、日本文化に興味のある留学生が、日本文化への「同化」として、ホスト文化である日本文化の規範に従う、という単純なものではない。むしろ、簡単に同化ができないからこそ、「吉舎おもてなしプラン」は、日本文化理解の場として、留学生に魅力あるものとなってきた。また、高校生にとっても異文化間理解の挑戦の場として魅力的な体験学習の場となってきた。留学生は、日本社会におけるおもてなしの「顧客」として迎え入れられ、一時的に、「同化」に近い体験をする。同時に、大学での授業では、日本文化における「顧客」の立場を客観的に内監し、現場で関わった人々と自身がおかれた立場と関係性について考察し皆で考える教育的指導を、現在、”Glocal Internship:

Intercultural Competence in Japanese Society”(「グローバル・インターンシップ：日本社会における異文化間能力」) の授業において行っている。

交換留学生は、日本文化に強い興味を持ち、将来的にキャリアで日本と関わることを希望している。卒業を遅らせてでも、日本に留学することを希望し来日している学生も多い。留学生は、日本で生活し、日本語とともに文化的価値観や行動規範を学ぶ過程で、自身のアイデンティティが揺らぐこともある。日本文化を知りたいと強く願いつつも、ホスト文化である日本文化の行動規範に必ずしも従って行動しているわけではなく、また、従う意思が必ずしもあるわけではなく、「同化」ではない。また、「同化」する体験を希望する留学生もいるが、教育的指導と状況的認知の経験なしには困難である。「おもてなし」を受ける体験は、アイデンティティに影響を受けるほどの異文化体験にはなりにくい。また、留学生による「留学生と日本の高校生の異文化間インタラクションを起こす方法」に関する実践グループプロジェクトは、留学生自身のアイデンティティを大きく揺るがすまでの体験とはなりにくい。自身で英語・日本語を選択して話すとともに自国文化を紹介する場面も多いことや、それを高校生が好意的に受け止めていることから、自身の文化を維持しつつホスト文化の文化的価値観を学ぼうとする「統合」を目指す体験と言えよう。日本に留学しても日本の学生や地域の人々と関わることができず「分離」の状態になりがちな留学生が、ホスト文化である日本文化の文化規範を学ぼうとする「統合」への扉の一部を開ける場として、本国際教育交流事業は機能してきたのではないか。

他方、高校生側は、自身の日本文化を維持しているが、相手の文化を拒否する「分離」ではなく、留学生の文化を主としてその文化的規範に従う「同化」でもない。また、双方を拒否する「周辺化」でもない。「おもてなし」で留学生を学校に迎え入れるパラダイムは、日本文化を維持し留学生に紹介しつつ、留学生の文化も学ぼうとする態度で実施されてきた。自身の文化を維持しつつそれが尊重される環境を作り、相手の文化的規範を学ぼうとする態度は「統合」と言えると考えられる。おもてなし国際教育交流は、高校生にとり、日本文化を留学生に伝える部分を根幹としており、初めて異なる文化に接触し、知見を高め、理解しつつ、日本のことを伝えようとする段階である。異文化に入り込み留学生の文化的規範に従う「同化」ではない。本教育事業の成果は、留学生の文化と「分離」する状況におかれることの多い地域高校生が、「おもてなし」の日本文化パラダイムにより留学生との関りを作る場を構築したこと、そして、双方の文化を学ぶ場を創り出したことで、相手の文化も学ぶ「統合」の場を作ることを可能としたことにある。それにより、留学生自身も、日本文化を学びながら自身の文化を伝える「統合」を体験している。

Castiglioni and Bennett (2018)が、文化的相違を抑制し、ホスト文化に合わせる一方的な適応を強要した場合、可能性を持つ価値が生かされない (Castiglioni and Bennett, 2018) と指摘するように、留学生と高校生の“cultural humility”(文化的謙虚さ)が、相互に文化的相違にアクセスしその相違を実体験から学ぼうとする異文化間接触の貴重な経験を創り出している。相互的な適応が サードカルチャーを生みコミュニケーションの場を作る (Castiglioni and Bennett, 2018; Bennett 2012) とあるように、高校生と留学生が相手の文化を理解しようと歩み寄る空間を教育の場に創り出してきたことに本事業の意義がある。

## 結語

本稿では、日本の大学の交換留学生と地域高校生の異文化間能力育成を目的として実施した国際教育交流に焦点をあて、留学生と高校生との異文化間インタラクションと関わりについて、アカルチュレーションの視点から考察を試みた。本国際教育交流会を発展させる過程で筆者が目指してきたのは、留学生と高校生の双方が、「分離」になりがちな状況から相互理解を目指し「統合」へとつながる場を構築することであったことについて再考した。留学生は日本文化を学ぶことを希望し、高校生は日本文化について留学生に伝えることを楽しみつつ留学生とつながり、留学生の文化も学ぶ。それが実現できる教育的施策について試行錯誤を続けてきたのである。留学生と地域社会との関りは現実的には様々な課題を残している。留学生と地域高校生は、通常の教育現場では、分離の状態におかれている現実は否定できない。それを双方から「統合」へと近づける一步を本事業は踏み出せてきたのではないか。

Bennet (2012) は、現実とは特殊な社会的・文化的文脈においてのみ自然に自覚するものであり、異文化体験とは意図的に自身の認識を再編成することであると述べている。異文化接触を通じ、相手の文化を理解することを双方が目指す体験学習をした学生や生徒が、自身の認識をどう再編し、どう変容し、自身の文化と相手文化との関係性をどう捉えようとしているのかについては、今後の調査を要する。

本年度の行事を終え、留学生を見送る場で、高校生の一人が留学生との出会いから大きな刺激を受けたことを話していた。出会いに感動しつつも、将来希望する職業が純和風の職業であるため、「国際とは関係がない」と述べている場面があった。思わず、「その和風を世界に伝えられる人」がいたら、日本の伝統の価値を世界に知ってもらえることができると伝えた。おもてなし国際教育交流が、自身と世界との関りについて考え始める第一歩となっていることを再確認する場面であった。異文化接触を体験した一人一人の生徒と留学生は、新しい出会いに何を思い、自身の将来へとつなげようとしているのであろうか。本年度も、その一步を踏み出そうとする姿と新しい挑戦への可能性を見ることができた。

## 参考文献

- Berry, John. W. 1992. "Acculturation and Adaptation in a New Society." *International Migration* 30 (s1): 69-85.
- Bennett, Milton J. 2012. "Paradigmatic Assumptions and a Developmental Approach to Intercultural Learning." In *Student Learning Abroad: What Our Students are Learning, What They're Not, and What We Can Do About It*, edited by M. Vande Berg, R. M. Paige, and K. H. Lou, 90-114. Sterling: Stylus Publishing.
- Castiglioni, Ida, and Milton J. Bennett. 2018. "Building Capacity for Intercultural Citizenship." *Open Journal of Social Sciences* 6 (3): 229-241.
- Tsunematsu, Naomi. 2023. "Agency, Autonomy, and Power of International Students in Interactions with Local Society in Japan through an Experiential Learning Project." *COMPARE: A Journal of Comparative and International Education* 53 (7): 1170-1188. DOI.10.1080/03057925.2021.2017767.
- 江渕一公 (1991) 「在日留学生と異文化教育 – 研究の視角と課題」『異文化間教育』第 5 号, pp.4-20.
- 恒松直美 (2023a) 「留学生と地域高校生の異文化間能力育成における異文化間インタラクション – 「関



- り」が生まれる空間とその文化継承 –」『広島県立日彰館高等学校研究紀要』第 20 号, pp.43-50.
- 恒松直美 (2023b)「留学生と高校生の国際教育交流におけるサードカルチャー体験：異文化接触とパラダイムシフト」『広島大学留学生教育』第 27 号, pp.28-42.
- 恒松直美 (2022)「国際教育交流における“Third Culture” – 留学生の日本留学目的と高校生の異文化間能力をつなぐ –」『広島県立日彰館高等学校研究紀要』第 19 号, pp.31-38.
- 恒松直美 (2021)「高校生と交換留学生の異文化間インタラクションの挑戦 – 異文化理解教育推進プログラム『吉舎おもてなしプラン』国際交流 –」『広島県立日彰館高等学校研究紀要』第 18 号, pp.51-64.
- 恒松直美 (2005)「日本社会における異文化理解：留学生の視点 – 国際交流 広島大学短期交換留学プログラム留学生日本語スピーチ発表会『広島大学留学生から見た日本』を開催して –」『広島大学留学生センター紀要』第 15 号, pp.37-62.

## 謝辞

広島県立日彰館高等学校と地域の皆様に心より感謝の意を表します。